

いずみさの
教 育



問合先
学校教育課

防災教育について～日常的な備えを～

平成28年2月に内閣府が実施した「日常生活における防災に関する意識や活動についての調査」では、食料や飲料水を蓄えている人の割合は38.2%でした。

災害発生時は、コンビニやスーパーなどには人が殺到し、すぐに商品が無くなります。支援物資もすぐには届きません。家庭での備蓄は「最低3日分」と言われていますが、非常に広い地域に甚大な被害が及ぶ可能性のある南海トラフ巨大地震では、それ以上の備蓄が必要だと言われています。災害への備えを「特別なこと」として取り組むのではなく、生活の中であたり前のこととして取り組むことが必要です。

市内の学校においては、例えば、地域の安全に役立てるための知識として消防署や消防施設などを社会科で、自然災害の発生メカニズムを理科や総合的な学習の時間で、また、安全な行動を身に付けさせるため、どういったときに何がしやすいのか、そのためにどんなことに気を付けたらいいかなどを体育や特別活動の時間などで、様々な教育活動を通して、環境教育や安全教育などの一環として行う「防災教育」に取り組んでいます。

平成28年度より、子どもたちが日常から防災と減災に深い関心を持ち、意識を高め、自ら考え判断し行動できる「防災力」を身につけることを目的として、市立小学校の4年生全員を対象に「ジュニア防災検定」を実施しています。この検定は、筆記試験・家族防災会議レポート・防災自由研究の3つから構成され、子どもたちの「防災力」を養うとともに、家族で防災に取り組む機会を提供しています。

また、令和元年度は、市内小・中学生24人が福島県相馬市を訪問しています。伝承鎮魂祈念館での聞き取り、松川浦港の復興状況や、磯部水産加工所・相馬市防災備蓄倉庫の見学、相馬市立中村第二中学校の生徒との交流などを通して、「復興への思い」や「自助・共助・公助」についてふれ、被災地から多くの学びを得ることができました。

今後も、災害時における危険を認識し、日常的な備えを行うとともに、状況に応じて的確な判断の下に、自らの安全を確保するための行動ができるように、社会貢献していかうとする態度を育てる「防災教育」を進めていきますので、ご理解ご協力をお願いします。



学校園紹介



ふわふわ言葉のとりくみ
～北中小学校～

北中小学校が、ふわふわ言葉の取組を始めてから、もう10年以上になります。相手を励ますあたたかい言葉を使うことによって、自分も相手も嬉しい楽しい気持ちになり、自尊感情が高められるとされています。これまでに、「ふわふわ言葉の歌」が作られたり、イメージキャラクターの「ふわりん」が登場したり、インパクトのある活動をしてきました。

今年度も代表委員会（児童会）が、ふわふわ言葉を広める活動をしています。ふわふわ言葉を使ったり聞いたりして、よい気持ちになった時のことを手紙に書いてポストに入れてもらう「ふわふわ日記」。ふわりんのカードにふわふわ言葉を書いて、それをつないで掲示する「ふわふわ列車」。これらの取組を代表委員の子どもたちがクラスを回って説明していました。



コロナ禍の中で、いろいろな活動に制限がかかっています。大人も子どもも、余裕がなくなるとついイライラしてしまいがちですが、一呼吸おいて焦らずに、ふわふわ言葉を使って、穏やかに過ごして欲しいと思います。



人とのかかわり・ふれあいを大切に
～のぞみこども園～

のぞみこども園では、様々な体験の中で自分の気持ちに気づき、表現することや、人とのかかわりの中で相手の気持ちを感じることができるよう、心の触れ合いを大切に仲間づくりをめざし、日々の保育に取り組んでいます。

【めざす子ども像】

- 友だちを思いやり、認め合う子ども
- 人の話を聴き、自分の思いを表現できる子ども
- 興味をもって取り組み、やり抜く子ども
- 自分で考え、自ら行動できる子ども

【大切にしていること】

季節のあそび…コロナ禍での保育で、活動や行事も縮小されていますが、そんな中でも、その季節にしかできない遊びを楽しめるよう工夫して取り組んでいます。



七夕会では「星空ツアー」と題して、七夕の夜を遊戯室に設定し、クラスごとにツアーを体験しました。光る星や等身大の織姫、彦星の様子を間近に見て楽しみました。



夏のプールは中止になりましたが、水遊びで思い切り気持ちを開放して遊べるよう、衛生面など十分対策をとりながら取り組みました。形は変わっても、友だちと楽しい思いを共有し、かかわりをもつことで、相手の気持ちに気づき、考えて行動できる子どもになって欲しいと思います。

